

「夜ごとの美女」

2009 (平成21) 年12月31日

鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本・台詞：ルネ・クレール

クロード (音楽教師) / ジェラルール・フィリップ

シュザンヌ (ルイ16世時代の貴族令嬢) (現代の修理工の娘) / マガリ・ヴァンドイユ

エドメ (1900年の貴婦人) (現代の貴婦人) / マルティエヌ・キャロル

レイラ (1830年のアルジェリアの姫君) (現代のカフェのレジ係) / ジーナ・ロロブリジダ

ルイ13世時代の美人、メガネの郵便局員 / マリリン・ビュフェル

カフェの老人、それぞれの時代で文句が多い老人 / パロー

ロジェ (自動車修理工、クロードの親友) / ビシュエール

ポール (薬屋、クロードの親友) / ジャン・パレデス

レオン (警官、クロードの親友) / ベルナル・ラジャリジュ

1952年・フランス映画・86分

配給/東和

<本作は、ひょっとしてフランス版の『男はつらいよ』?>

いずれもジェラルール・フィリップが主演した、レイモン・ラディグ原作の『肉体の悪魔』(47年)は17歳の高校生と人妻との禁断の恋を、スタンダール原作の『赤と黒』(54年)は野望に満ちた平民の美青年と貴族の人妻との身分違いの恋を描いた、いかにもフランス的かつ深刻な恋物語。

それに対して本作は、毒にも薬にもならないロマンティック・コメディ(?)で、異論を恐れずあえて言えば、フランス版『男はつらいよ』。もちろん、本作で現代に生きるしがない音楽教師の主人公クロードを演じた美青年ジェラルール・フィリップと、フーテンの寅さんを演じた喜劇俳優渥美清の外見は顔も足の長さも正反対だが、恋に対する心意気は全く同じ?

もっとも、計49作という最大のシリーズとなった『男はつらいよ』は、いつもかなりいい線まで行くものの結局は失恋するのがお決まりのパターンだったが、夜毎3人の美女と出会うクロードの恋はひょっとしてハッピーエンド?

<これぞ男の夢!バラエティー豊かな3人の美女は?>

『男はつらいよ』におけるマドンナは一作につきお一人様限定だったが、現代からルイ16世の時代、ルイ13世の時代まで、さらにローマ帝国の時代や原始時代からノアの方舟時代まで、クロードが夢の中で駆け抜けるというバカバカしい本作には、3人の美女が登場する。その第1は、現代の修理工の娘から夢の中ではルイ16世時代の貴族令嬢に変身するシュザンヌ(マガリ・ヴァンドイユ)、第2は1900年の貴族の令嬢を演ずるエドメ(マルティエヌ・キャロル)、そして第3は現代のカフェのレジ係から1830年のアルジェリアのお姫さまに変身するレイラ(ジーナ・ロロブリジダ)だ。

2010年1月6日付産経新聞は「一夫多妻は南アの文化だ」「大統領に3人目の妻」との見出しで、今年6月にサッカー・ワールドカップが開幕する南アフリカ共和国のズマ大統領が4日、5回目の結婚をしたことを報じた。同大統領は別の女性とも結納を交わしており、4人目の女性とも今年中に挙式する予定らしい。つまり南アでは一夫多妻制が認められているわけだが、21世紀の今さすがに「女性蔑視だ」「一夫多妻は南アの伝統文化」と世論は二分しているとのことだ。本作のクロードは現実の世界ではしがない音楽教師にすぎないが、いったん眠りについてしまうと夢の中でこれら3人の美女に出会うことができるから、これぞ男の夢!

<うまく分散できれば、いいのだが・・・>

「禍福はあざなえる縄のごとし」というものの、私の体験では、いいことも悪いこともなぜか重なることが多い。「マーフィーの法則」はいろいろ定義されているが、私の理解では我々の身の回りには何とも皮肉なことがよく起きるといふ法則をうまくまとめたもの。なるほどそういうことか、という体験を私たちは何度も重ねているはずだ。そんな体験を本作に即して考えると、女にモテない時はとことんダメだが、モテ始めると次々にデートの約束が続くということがある。現にクロードは、今夜の夢では①ルイ16世の時代では、シュザンヌと駆落ちの約束を交わし、②アルジェリアでは、レイラ姫と月の出のデートを約束、③1900年の時代では、エドメからディナー後の密会の約束、とモテモテ。

もっとも、本作の面白い仕掛けは、クロードがそんな超幸せな夢を見たのが警察の留置所の中だったということ。なぜ真面目な音楽教師であるはずのクロードが、親友の一人である警察官のレオン(ベルナル・ラジャリジュ)の手によって留置所に入れられることになったのかはあなたの目で確認してもらいたいが、せっかくだが夢を見ているクロードをたたき起こしたのは、クロードの親友であるロジェ(ビシュエール)とポール(ジャン・パレデス)の2人。クロードの釈放はロジェとポールが親友としてクロードの早期釈放のために奔走した結果だが、残念ながらこれはクロードにとってありがた迷惑な話になったようだ。そのうえ、やっと釈放されたクロードが一刻も早く夢の世界に戻ろうとすることを心配したロジェとポールは、「飲みにいこう」「カードをしよう」と変に気づかってくれたから、やっとクロードが再度夢の世界に戻った時は?

約束には時間が付き物だから、約束の時間を過ぎてしまうとすべての甘いお話はパー。さあ、そこから起きる次のドタバタ劇とは?

<ホントにオペラの作曲を?>

1985年にアカデミー賞作品賞・監督賞など8部門を受賞した『アマデウス』(84年)は、私の大好きな映画。その中で私が一番印象に残っているセリフは、サリエリ扮する仮面の男から注文されていた『レクイエム』の作曲が「いつできるのか?」と催促されたことに対して、モーツァルトが「それは既にできている」つまり「その楽譜はすべてこの頭の中にある」と応えるシーンだ。簡単なピアノソナタやバイオリンソナタのみならず、三重奏や四重奏から交響曲まで、さらにはオペラに至るまで、モーツァルトの頭の中には楽譜がいっぱい完成しており、あと必要な作業はそれをペンで紙に書き写すことだけというわけだ。それに対して、クロードはピアノは上手そうだし作曲にも挑戦しているようだが、しがないピアノ教師にすぎないクロードにホントにオペラの作曲ができるの?そのレベルに達するには、ちゃんとした音楽学校に入って作曲を学ばなければムリなのでは?

ついそう思ってしまうが、映画はいい加減なもの?クロードは自ら作曲したオペラをオペラ座に応募していたが、さてその出来は?応募したにもかかわらず何の連絡もないということは、落選まちがいなしということ。誰でもそう考えるのが普通だが、この手のロマンティック・コメディでは何でもあり?第二次世界大戦の終了から間もない1953年に、フランスでこんな明るく楽しいロマンティック・コメディがつけられていたことにあらためてビックリ。

2010 (平

成22) 年1月7日記